

PUMPKIN（模擬原爆）の投下を 当時の日本の報道機関はどう報じたか（二）

菊池良輝

【7月26日】

Target name : Kashiwazaki（新潟縣柏崎市）

『新潟日報（7/27）』に、「主見出し（3段）：B29単機で爆弾攻撃 袖：編隊を離れて不意打ちに空巢戦法・危い“又一機か”の油断」とし、以下のように報じている。

（リード記事）「二十六日……次いで午前八時……卅五分頃長野縣から本縣南部侵入した別のB29一機は柏崎附近から日本海に行動後、反轉し突如刈羽郡の一部に爆弾を投下九時過ぎに長野縣へと脱去したが、右被害も軽微であった。」

見出しにもあるが、本文でも、この一機は編隊から離れた“コソ泥式空巢戦法”として、警戒を呼びかけ、「一機ぐらいと軽く見て被害にあった例もあるので注意せよ」と記すとともに、また、「一機にての飛來は、むしろ人心の虚をつき、これを混亂させるといった兒戲的謀略を多分に狙っていることは今更いふまでもない」とも記している⁽⁷⁶⁾。

『毎日新聞 [大阪]（7/27）』が、「廿六日……B29二機が朝八時五十五分長野縣から新潟縣に侵入、日本海を行動爆弾を投下したが被害なし」と記している⁽⁷⁷⁾。

『讀賣報知（7/27）』が、「廿六日……同朝大阪地區及び新潟地區に侵入したB29各一機も同様投弾してゐる」と報じている⁽⁷⁸⁾。

なお、『新潟日報』が、1997年（平成9年）8月4（月）～6（水）の3日にわたり、新潟縣長岡市（7/20）・柏崎市（7/26）・兩鹿瀬村（7/26）のそれぞれに落とされた模擬原爆につ

き特集している⁽⁷⁹⁾。同紙は5日の紙面で刈羽郡とある投弾地を柏崎市長崎（旧・刈羽<郡：菊池注>西中通村）としている。

『柏崎市史』に、「七月二四日午前八時三五分長野方向より県南部に侵入したB29一機は柏崎付近より日本海に抜けたかに見えたが、反轉し、西中通村長崎地内越後線の両側に爆弾二、三個投下し長野方向に去った。被害としては、この時付近で田草取作業中の女子二名が爆死、重傷者二名・軽傷者四名を出し……（柏崎消防本部事務報告書）」との記述がある⁽⁸⁰⁾。

24日とあるが「509th CG表」始め米軍資料には、24日に柏崎・刈羽方面にて行動した記録はなく、投弾地・時間等の状況から26日の刈羽郡の一部への模擬原爆の投下記事と思われる。また爆弾2・3個との記述もあるが、それは爆発の凄まじさの所以からの描写かもしれない。

Target name : U/I 37° 43' N 139° 31' E

（目標不詳。北緯37度43分 東経139度31分：新潟縣東蒲原郡兩鹿瀬村）

『新潟日報（7/27）』に、「見出し（3段）主：B29単機で爆弾攻撃 袖：編隊を離れて不意打ちに空巢戦法・危い“又一機か”の油断」とあり、以下の記述がある。

（リード記事）「二十六日午前八時廿分ごろ、福島縣から本縣北部に侵入したB29一機は、廿八分頃東蒲原郡の一部に投弾し直ちに侵入路を経て福島縣へと脱去したが被害はなかった⁽⁸¹⁾。」

他紙では、『朝日新聞東京本社（7/27）』が、

「廿六日九時頃大型機二機が新潟地区に行動」とベタ記事で伝えている⁽⁸²⁾。同紙は翌28日、一機で来襲し大型爆弾を投下していくB29に、警戒を呼びかける記事を掲載しているが、同村への投下につき、「二十六日新潟地区某村の鉄道を狙って投弾」と記している⁽⁸³⁾。

また、『毎日新聞 [大阪] (7/27)』が、「廿六日朝八時廿分ごろB29一機が福島縣から新潟縣北部に侵入、爆弾一個を投下」と報じ⁽⁸⁴⁾、『讀賣報知 (7/27)』が、「二十六日……新潟地区に侵入したB29一機が投弾」と報じている⁽⁸⁵⁾。

「509th CG表」が記す同経緯度は両鹿瀬村深戸（阿賀野川左岸）地域に当たる。しかし実際の投下地点は丈山（阿賀野川右岸）であり、目標経緯度と実際の着弾点は阿賀野川を挟んで2.8キロメートル離れている⁽⁸⁶⁾。

同地点は両鹿瀬村立向鹿瀬国民学校（現・阿賀町立鹿瀬小）から200メートル程しか離れておらず、しかも学童の方が一の避難場所であった。

当時、同校の教壇に立っていた長谷川フミ（上川村広谷）氏は、以下のように述べている。

向鹿瀬国民学校第四学年女子部教室の一時限である。……授業を始めて間もなくだったと思う。突然、空襲警報が発令された。校舎内のベルが一斉に「ビ、ビ、ビ、ビ、ビ」と、連続に鳴った。警戒警報は「ビー、ビー、ビー」と間が入る。今迄は警戒警報が鳴って避難場へ避難する。避難場でいて空襲警報が鳴った時もあった。「今の警報は空襲警報だ。」⁽⁸⁷⁾。

また、当時の校長齋藤国一郎氏は「世の中何が幸わせになるかわからないものだ。もし空襲警報が普段と同じように敵機襲来以前に出され、充分避難する時間があつたら一〇〇〇名に近い子どもたちの命はどうなっていたかわからない。」としみじみ語っていた、と言う⁽⁸⁸⁾。

いずれもいきなり空襲警報が発令されたように記しているが、以下の記述がある。

それから僕達が3年生の時である。朝始っ

て朝礼をしていると、サイレンが鹿瀬全体にひびきわたり、警戒警報が発せられた。先生を始め私達もなんでもないと教室にはいった。その時の僕達の先生は杉崎先生であった。（以下、修身の授業中に投弾され、相当の被害が生じたことを記している）⁽⁸⁹⁾。

いきなり空襲警報が鳴ったとする現職の二教員の言も、警戒警報が鳴ったとする当時の学童の言も、共にかなり具体性を帯びており、「空襲」・「警戒」いずれが先かの早急な判断は避ける必要がありそうである。

ところで「509th CG表」には、この時のTarget nameは「U/I 37° 43' N 139° 31' E (Unidentified = 目標不詳。北緯37度43分、東経139度31分)とあって、模擬原爆投下中唯一具体的地名を欠いている。

この爆撃機は当初、長岡を目標としていたようだが⁽⁹⁰⁾、鹿瀬に投下している。

当地には投弾地に隣接して昭和電工鹿瀬工場があり、そのことは米軍も捉えている⁽⁹¹⁾。

同工場は連合軍捕虜収容所の一つとなっていた⁽⁹²⁾。終戦時288名の捕虜が収容されていたという⁽⁹³⁾。

捕虜が収容されている箇所への爆撃は一般的には考え難いところだが、長崎への原爆投下に際し、郊外にあった捕虜収容所への打撃を憂慮する発言に対し、マンハッタン計画の責任者グローブス Leslie R. Groves 将軍は、「（原爆投下に際し）捕虜収容所への位置を考慮に入れての目標の変更は一切行なわないこと、しかし標準点の選定にあたり、捕虜収容所にも命中する可能性を減ずるような方法によって修正することはできる」と述べたといわれる⁽⁹⁴⁾。

前記、内海氏によれば日本には3万人を超す連合軍捕虜が、130箇所の収容所に収容されていたという⁽⁹⁵⁾。それらを避けての爆撃は如何に米軍といえども実際上不可能であったろう。

また、同工場から直線距離にして2キロメートルほど上流に日本発送電鹿瀬発電所があり、これも捉えられている⁽⁹⁶⁾。

米軍資料では1944年(か?。昭和19年)11月24日に作成したらしい日本国内の捕虜収容所所在地が118箇所記載されている。鹿瀬は載っていない⁽⁹⁷⁾。内海氏によれば鹿瀬に捕虜派遣所が開設されたのはそれ以前の1944年4月15日のことであった⁽⁹⁸⁾。

この時、流木を挽いていた昭和電工の熟練工が腹部に重傷を負ったが、診療所医師の適切な執刀により一命をとり止めている⁽⁹⁹⁾。

なお、『新潟日報』が、前記の通り、1997(平成9)年8月4(月)～6(水)の3日にわたり、新潟県長岡市(7/20)・柏崎市(7/26)・両鹿瀬村(7/26)のそれぞれに落とされた模擬原爆につき特集しているが⁽¹⁰⁰⁾、『写真が語る原爆投下』にも爆裂写真が掲載されている⁽¹⁰¹⁾。

新潟県東蒲原郡両鹿瀬村は現・同郡阿賀町

Target name : Hitachi Copper

(日立精銅所。茨城県日立市)

『写真が語る原爆投下』に爆裂写真が掲載されている⁽¹⁰²⁾。

『日立戦災史』は、「七月二六日B-29一機が大型破碎爆弾一発を投下した。……米国戦略爆撃調査の記録が示すところによれば、隣接する日鉦銅精錬所が攻撃目標であった⁽¹⁰³⁾」とし、機能的損害を詳説している。

『模擬原爆と春日井』は着弾地点を、「日立市白銀町、日立山手工場正門前道路」としている⁽¹⁰⁴⁾。

Target name: Taira Ind. Area

(平工業地帯：福島県平市)

『福島民報』が7月27日(金)から連日報道している。

27日は「見出し(3段)主：素早い待避に凱歌 袖：爆弾に怯まぬ平市民」とし以下のように記している。

(リード記事)【縣警防課発表】廿六日午前八時五十分頃B29小數機は本縣東南部に侵入、西北進し會津方面を行動したのち平市上空に

おいて爆弾一個を投彈、東方洋上に脱去したるも被害輕微なり

(本文) 憎いB29の小數機は廿六日午前九時頃平市上空に於いて大型爆弾一個を投彈し、東方洋上に姿をくらましたがさすがは實戰の輕驗を積んだ平市民だけに敏速な退避を行ったので幸ひにも被害は輕微であった、……平市今回の爆撃で受けた教訓は退避を敏荒に行ふことに盡きる、退避壕に難を避けた者は不完全と思はれる壕内でもかすり傷一つ負つてゐない、退避信號を受けながらまごまごしてゐたものは倒壞家屋や硝子の破片などで被害を受けてゐる⁽¹⁰⁵⁾。

28日は、「見出し(3段)主：情況判斷的確に“休校”の斷も結構」袖：「學童保護校長の責任で行へ」とし以下のように記している。

(本文) ○機は廿六日も縣下に侵入して平市内の國民學校近くに大型爆彈一個を投下した、さきに福島市外の田圃の中に同様爆彈一個を投下したが國民學校から投彈個所までは相當の距離があつたので學校からは一人の怪我人も出さずにすんだが、これからは都市だとか海岸通りだからといふだけでなく山林にも敵機の投彈に曝される危險が非常に多くなって來る、しかも最近の敵機の行動が著しく變つたのは大型爆彈の投下である、今までの敵機はたとへ三機、四機位が進入して來てもいはゆる偵察だけで投彈しなかつたのでまた、偵察かといった調子で見くびつてゐた、かうした考へ方は縣民の大部分に強くこびりついてゐる、然し福島市外の例にしても平市の場合でも單機が偵察と見せかけて投彈してをり敵が國民學校を爆撃目標とする傾向は○い、従つてたとへ山の中の學校であっても敵機來襲○對する周到な準備と注意が必要で縣教育課では敵機來襲激化の學校教育について次のやうに要望してゐる。

(以下大意)

「敵機來襲狀況には臨時休校の措置を」「校長の判斷による家庭學習の措置を」「臨時休

校等の措置は県の指令を待たず、独自の判断で」等を記述している⁽¹⁰⁶⁾。

29日は警察署長の言を載せている。

「見出し（2段）主：“一機”に狎れると危険
袖：下重平署長に聴く戦訓」

平市への投弾について下重平署長は次の通り
戦訓を語った

今回の爆弾は高臺に投下されたのと、晝間だったので被害を最小限に喰い止めたことは不幸中の幸いであった、然し、平市民は縣内で敵襲爆撃を受けてゐるに拘わらず、却って敵襲に馴れ過ぎてゐる〇があり、今回の戦訓は恐らく全市民の身に浸みたものと思ふ、全體的に注意を促したいことは、『爆弾とは常識的に六十度位の角度で爆風が上に向ふもの』とのみ考へられてゐたのに、今回の爆風は高臺から相當低い方面にまで威力を及ぼしてゐる、被害を受けたものは殆んど退避のおくれたもので、硝子の破片などで負傷してゐる、また、これは何時も敵機の通過に馴れ「又か」と云ふ風に軽く見たのがとんだ被害を受けた、反對に退避したものは、〇〇無い壕に入ったものもかすり傷一つ負ってゐない、如何なる場合でも迅速に退避すれば爆風の被害を免れること〇教へてくれた、要〇すれば敵が一機の場合でも〇〇輕視せず缸荒に退避すること。窓の硝子は完全に開放すること、これだけは勵行して難を最少限度に避けたい⁽¹⁰⁷⁾。

『讀賣報知（7/27）』もやや詳しく報道している。「主見出し（2段）：國民校に大型爆弾
袖：平市侵入の一機焼夷弾も混投」とあり、以下のように報道している。

廿六日朝福島地區に侵入したB29四機のうち一機は午前八時五十六分ごろ突如平市某町國民學校に大型爆弾一箇を投下するとともに焼夷弾をばらまいた、このため同校並びに付近民家に多少の被害があった、……⁽¹⁰⁸⁾。

なお、「大型爆弾一箇を投下するとともに焼夷弾をばらまいた」とあるが、改造型B-29は

模擬原爆一個しか投下しない⁽¹⁰⁹⁾。

一機來襲への警戒心は『新潟日報（7/27）』も平市への爆撃を引用し以下のように呼びかけている。

【福島發】廿六日午前八時五十六分頃平市にB29一機侵入、市民は「一機だから偵察だらう」と多寡をくゝつてゐたところ爆弾一個を投下、某國民學校に命中し、職員兒童數名傷ついた、敵の來襲はいよいよ鬼畜性を現してきたといふべきで一機だからと馬鹿にして情報にも注意せず待避もせず思はぬ不覺をとることは最も戒心すべきである⁽¹¹⁰⁾。

『朝日新聞東京本社（7/28）』が「一機來襲」への油断を戒める記事で、「二十六日朝平市の某國民學校にも一機で來て投弾してゐる」と、平の例も挙げている⁽¹¹¹⁾。

『ふくしま 戦争と人間』はこの時の爆撃を「五百キロ爆弾一個の投弾だったが、落ちた場所が平一小だった」とすると共に、「平上空で投弾、錦の工場街にも投弾して海上へ去る。平一小爆撃のB29は鹿島灘から侵入し、いったん会津まで侵入したあと、平上空に戻って投弾したとされている」としている⁽¹¹²⁾。同書は、当時の平警察署長が終戦直後、県警察部長に提出した報告書の中で、「一トン着発信管の爆弾投下せらるるや」と表現していることを伝えている。

模擬原爆にはAN-MK219と呼ばれた高性能接触信管が3個装着されていたが、それに触れた珍しい例である。

『日本都市戦災地図』⁽¹¹³⁾では平駅を挟んだ二ヶ所が爆撃されたとしているが、「509th CG表」も一弾とし、『讀賣報知』の記事にも有る通り、一ヶ所は焼夷弾と思われる。某國民學校とは平市立第一國民學校。現・いわき市立第一小学校（いわき市平字揚土5）⁽¹¹⁴⁾。「幸ひにも被害は輕微であった」とあるが、同小の教員3人が殉職、53人の負傷者を出した外、同小が壊滅、民家1,517戸が破壊された⁽¹¹⁵⁾。

『写真が語る原爆投下』に平市立第一國民學

校に投下された爆裂写真が掲載されている⁽¹¹⁶⁾。

前記、『福島民報』の記事中に当該機が、「會津方面を行動したのち」とあり、『ふくしま 戦争と人間』には、「いったん会津まで侵入したあと、平上空に戻って……」との記述がある。B-29の航続距離（約6,500キロメートル⁽¹¹⁷⁾）からみて、テナアン北飛行場 N. Airfield Tinian I. から飛び立ったB-29が効率的な攻撃ができるのは北緯39度以南と言われ、南東北地域が北限であろう⁽¹¹⁸⁾。

B-29に装備されていたノルデンM-9爆撃標準器の標準精度⁽¹¹⁹⁾から見て会津に迷い込んだとは考え難い。航続距離を勘案すると、何らかの目的があつて会津上空に飛来したと見るべきであろう。

若松には連隊兵営があり、大正14年1月に仙台から移駐した歩兵第二十九聯隊を嚆矢として連隊編成が続いていた⁽¹²⁰⁾。そのことは米軍も捉えている⁽¹²¹⁾。

また、日本発送電鹿瀬・豊実（56,400kW）及び大井発電所（49,600kW）と共に当時、日本四大発電所と称されていた猪苗代発電所⁽¹²²⁾も米軍に捉えられていた⁽¹²³⁾。

共に攻撃目標に不足はない。

模擬原爆を投下したB-29は着弾瞬間の爆裂写真を撮影している⁽¹²⁴⁾。実際に、「目標を隠す雲というのは何も厚い雲とは限らなかった。極めて薄い霞のような濛気であっても、地上からはB-29がはっきり見えるのに、上空からは濛気が散乱する光に妨げられて、地上を目視することはできなかった」と言う現実があり⁽¹²⁵⁾、「晴れている」ことは模擬原爆投下に際してのほぼ必須の条件である。

猪苗代測候所（〈会津〉若松測候所の前身）に当時の気象データが残されており、気温・風速・日照等のデータを詳細に検討された福島気象台の千葉仁一氏は、26日の気象状況を次のように推測されている。

午前中は薄曇りの状態で、猪苗代湖上に薄い霧が出ていた。午後には雲が徐々に厚くな

り、16時12分～32分にかけて弱い雨が降った。風は午後になって多少強くなった。

この気象状況とB-29の反転との間の因果関係は不明だが一つの状況として挙げた。

なお、29日（日）に郡山が爆撃されているが、この時もB-29は一旦会津に向かい反転したとの記述がある（後述、「郡山」条参照）。

Target name : Shimada（静岡縣志太郡島田町）

『静岡新聞（7/27）』に「見出し（1段）：清水、島田に投弾」とし、以下の記事がある。

別に廿五日夜来B29その他小型機は單機または小數機をもつて斷續的に殆んど管内全〇にわたり行動し廿五日夜來廿六日十二時まで延機數約廿機に及び一部は名古屋東方並に島田付近及清水付近海上等に投弾したが被害極めて輕微⁽¹²⁶⁾。

「被害極めて輕微」とあるが、『明日までつづく物語』には、「26日午前8時30分頃の爆撃により、即死者33名、他に軍人2名及び町内外幾人かの死者を出した」と記し⁽¹²⁷⁾、『静岡県民衆の歴史を掘る一人びとの生きたくらしと歩み一』に、「即死者35名、重傷死者14名、……時刻は午前八時半」とあり⁽¹²⁸⁾、『模擬原爆と春日井』には、「死者49、負傷150と舞鶴につぐ大きな犠牲者をだした」とある⁽¹²⁹⁾。『写真が語る原爆投下』には、「7月26日、午前8時35分、静岡県島田市扇町普門院附近に投弾……死者49名」⁽¹³⁰⁾とある。

『朝日新聞東京本社（7/28）』は「一機來襲」への油断を戒める記事で、「二十六日朝八時四十五分静岡縣でも一機投弾が二件もあつた」としているが⁽¹³¹⁾、当日、静岡県には濱松市・島田町・焼津町の三箇所に模擬原爆が投下されている。情報が正確に伝わっていない。

『朝日新聞大阪本社（7/27）』がベタ記事で、「島田附近……に投弾したるも被害は〇〇」としている⁽¹³²⁾。

なお、『原爆投下訓練と島田空襲一聞かせてください一九四五年七月二六日のことを一』に

「島田へのパンプキン投下は、島田海軍技術研究所を狙ったものではないのか、と質問する人もいる」⁽¹³³⁾との記述がある。しかし、同書の著者はこの見方を否定している。実際、米軍が作成した日本各地・各職種別の「目標 (Target Name)」には、それらしい記述は見当たらない。

『写真が語る原爆投下』に同町への爆裂写真が掲載されている⁽¹³⁴⁾。

静岡県志太郡島田町は現・静岡県島田市

Target name : Nagoya (愛知県名古屋)

『中部日本新聞 (7/27)』に、「見出し (横) 主：一機とて侮るな 袖：偵察と見せて投弾」とあり、以下のように記述している。

たかが B29 一機とて油断するな……二十六日も敵 B29 は一機ずつで延十機以上が東海地区をはじめ阪神地方を行動したがこの B 公一機がなかなかの曲者、単なる偵察と見せかけて名古屋、大阪等で爆弾を投下士気の沮喪を狙った、その被害はもとよりとるに足らぬが、待避せず無用な犬死を逐げたり火の始末を忘れて大切な國家の戦力を灰燼にすることは利敵行為だ、圖太い神経とはあくまで慎重に行動することを意味するのだ⁽¹³⁵⁾。

文中、「B 公一機がなかなかの曲者」などといささか感情的な表現を用いている。

「名古屋、大阪等で爆弾を投下」とは26日の名古屋市昭和区への、また、大阪市東住吉区への模擬原爆の投下を指している。「その被害はもとよりとるに足らぬが」とあるが、名古屋では死者 2・傷者 6・全半壊 14 の被害を出している⁽¹³⁶⁾。

『模擬原爆と春日井』が着弾地点を「名古屋市昭和区山手通二丁目 (八事日赤病院角)」としている⁽¹³⁷⁾。

なお、昭和48年、『中日新聞』が、「28年目の証言」と題し、当該爆撃を特集している⁽¹³⁸⁾。同紙記載による被害者の言により、模擬原爆の投下は午前9時過ぎと推定される⁽¹³⁹⁾。

Target name : Hamamatsu (静岡県濱松市)

『朝日新聞東京本社 (7/27)』が、「見出し (1 段)：静岡県に投弾」とし、以下のように記述している。

廿六日朝八時四十分ころ長野縣下に侵入した B29 二機は浜松附近及び静岡上空から南方に遁走した、脱去に際して敵は一部に投弾したがいづれも民家畑地等に落下、民家の一部が倒壊したほか被害は極めて軽微だったが、浜松市には一トン或は五百キロの大型爆弾を使用してゐる事は今後嚴重な警戒を要する⁽¹⁴⁰⁾。

『朝日新聞大阪本社 (7/27)』が、「見出し (1 段)：濱松へ 一噸爆弾」と題し、ほぼ同文を掲載している⁽¹⁴¹⁾。

『静岡新聞 (7/27)』が、「主 (1 段) 一機ばかりと侮るな」と題し、以下のように述べている。

廿六日八時四十五分敵 B29 一機が浜松市を旋回の後南方に脱去したが敵機はわが正確なる高射砲の被弾により基地への帰還は覺束ないものと見られるほど速力を落とすつゝ遁走した、この敵機の○動に対して市民は一機ばかりと侮って高をくゝってか大胆にも頭上を進行するのを平氣で見てゐたが、強烈な爆發音を聞いて始めてびっくりしてその場に身を伏せたり、壕を捜してゐるといふ有様が散見された、敵は脱去すると見せかけて何処へ投弾するかも知れず一機ばかりと侮らず○○な態度をもって油断禁物を信条として空襲警報発令中より警戒警報中に投弾する方が遙かに危ないことを知るべきであり敵が今後頻頻と大型爆弾の投下を覺悟すべきである⁽¹⁴²⁾。

また、『讀賣報知 (7/27)』が、平・大阪・東京等と共に「濱松市内の畑中に大型爆弾一箇」を投弾したことを報じている⁽¹⁴³⁾。

『朝日新聞東京本社 (7/28)』が「一機來襲」への油断を戒める記事で、「二十六日朝八時四十五分静岡縣でも一機投弾が二件あった」としているが、先記した通り (「島田町」条)、この

日静岡県に投弾されたのは濱松市の外、島田町・焼津町の3箇所である⁽¹⁴⁴⁾。

『浜松大空襲』は、「被弾区町名：将監。死傷者数：死者1・重傷1」としている⁽¹⁴⁵⁾。『模擬原爆と春日井市』も着弾地点を市将監町としている⁽¹⁴⁶⁾。

Target name : Toyama（富山市）

『北日本新聞（7/27）』に、「見出し（3段）主：富山市に又も投弾 袖：B29伏木，新湊に投雷」とあり，以下の記事がある。

廿五日夜から廿六日朝にかけてB29十八機は北陸方面海岸に來襲，新潟から若狭灣に至る主なる港，富山灣の伏木，新湊附近の海上および陸上に機雷を投下したほか一機は富山市奥田附近に爆弾1個投下した⁽¹⁴⁷⁾。

『日本都市戦災地図』富山市に，大廣田村豊田（昭和15年富山市編入：菊池注）に，7月26日着弾とある⁽¹⁴⁸⁾。

『富山県警察史』に、「ついで（昭和二十年）七月二十六日朝，またまた一機が富山市上空に現われ，ゆっくりと旋回しながら，豊田付近にだれの目にもわかるほど大きな爆弾を投下し，死者六名，重軽傷者五十余名，全壊八戸，半壊五十戸の被害を与えた。」とある⁽¹⁴⁹⁾。

『富山大空襲』はさらに，「（市民もまた，富山大空襲を疑わなかった）。それは富山市の東域に，従業員二万九千人（昭和十九年末には三万六千人もいた）をかかえた県下の一大軍需企業・不二越工場があったからである」としている⁽¹⁵⁰⁾。

投弾時間については最初午前8時35分，最後同9時04分とある⁽¹⁵¹⁾。

Target name : Osaka（大阪市）

『朝日新聞大阪本社（7/27）』に、「見出し（3段）主：「反轉，大阪へ投弾 袖：偽瞞行動混合の來襲」として以下の記事を掲載している。

二十六日……ついで七時十七分ころより志摩半島西方に侵入したB29約十機は單機毎に

行動，……内一機は富山附近で反轉，九時十五分ころ再び福井附近へ侵入南進，大津附近で旋回の後大阪へ侵入投弾，……九時五十分頃紀伊半島東南側より脱去

別に九時十分ころ高知附近より侵入のB29一機は〇〇縣東部，高知，淡路島北部，大阪をへて京都南部で反轉大阪南〇に投〇，十時過ぎ高見附近より一旦東海軍管區に入り，熊野灘で旋回脱去と見せかけ，再び（以下，10数字判読不能。「再び」大阪に返したのであれば重要な記事となるが，惜しまれる判読不能状態である）⁽¹⁵²⁾。

『毎日新聞 [東京]（7/27）』に見出し（2段）：「卅余機，近畿，中國を行動」とし，本文が以下のようにある。

【大阪発】廿五日深更から廿六日早曉に亘り，近畿，中國各地にかけ分散侵入したB29卅數機の行動次の通り

廿六日午前七時十五分から八時十五分の間熊野灘から侵入したB29約十機は逐次北進して福井縣下に侵入の後變針，何れも東海軍管區へ侵入した，このうち一機は富山附近で反轉し九時十五分ころ再び福井縣に侵入，大津市附近を偵察後，大阪東南部に投弾後和歌山縣南部を経て十時ごろ紀伊半島東南部から脱去

九時ごろ高知附近に侵入したB29一機は松山附近を経て淡路島北部から大阪に侵入，大阪北西部に投弾，一旦熊野灘に脱去したが再び北上，十時半ごろ滋賀縣南部から敦賀，福井を経て東海軍管區内に侵入⁽¹⁵³⁾。

『京都新聞（7/27）』『神戸新聞（7/27）』では，「見出し（『京都新聞』3段：『神戸新聞（7/27）』2段）：大阪に投弾 京阪神を偵察執拗」等とし次のように記述している。

二十六日午前敵二機は別々の航路をとって逐次京阪神要地に侵入，執拗にも要地の上空を數回に亘り旋回偵察のち大阪市東南部に投弾，脱去したが敵の偵察より推して京阪神要地は特に嚴戒を要する，……一機は……午

前九時半ごろ大津附近を旋回のち西進、大阪東南部に投弾した、更に高知附近から侵入した一機は四国西部を迂回したのち同九時五十分ごろ大阪を経て京都に侵入反轉して吹田市附近を旋回、これまた大阪市北西部に投弾のち脱去した⁽¹⁵⁴⁾。(本文記事はほぼ同文) 「509th CG表」ではこの日の爆撃は1発としている。

しかし、『毎日新聞 [東京] (7/27)』『京都新聞 (7/27)』『神戸新聞 (7/27)』等の記事を見ると、市東南部と北西部二箇所と同種の爆弾が投下されている。『朝日新聞東京本社 (7/28)』は「二十七日午前九時半頃大阪東住吉区にB29一機が侵入、一弾だけ投下したが、従来から使用されたことのない大型爆弾ではないかと判断される」としている⁽¹⁵⁵⁾。明らかに模擬原爆の投下記事だが、米軍資料及び焼夷弾爆撃の事実からみて、7月27日に大阪が模擬原爆を投下された事実や、焼夷弾爆撃された事実はない。文脈からも26日の誤りと推定されるが、注目されるのは東南部(東住吉区)への投弾記事しかないことである。北西部への投弾を記していない。

戦後の研究では、『大阪大空襲—大阪が壊滅した日』に、「七月二十六日には、B29一機が東住吉区田辺本町に大型爆弾一個を投下、全壊二〇三戸、半壊二一八戸、罹災者一三〇二人、死者四人、重軽傷者八五人、行方不明六人の被害を生じた⁽¹⁵⁶⁾」とあって、その惨状を伝えるとともに、市東南部(東住吉区)への投弾のみを記している。

『大阪府の百年』でもほぼ同文を記しているが大阪上空飛来時間を「午前九時四〇分」としている⁽¹⁵⁷⁾。

なお、『毎日新聞大阪本社』が1991年(平成3年)12月に3日に渡り「模擬原爆 東住吉区に投下」と題して記事を連載しているが、投下箇所としては東住吉区一箇所のみである⁽¹⁵⁸⁾。

『写真が語る原爆投下』でも一発のみの爆裂写真を掲載し、午前8時30分、大阪市東住吉区

田辺本町料亭「金剛荘」に投弾、と記している⁽¹⁵⁹⁾。

『毎日新聞 [東京] (7/27)』『京都新聞 (7/27)』『神戸新聞 (7/27)』は、その報道内容から同系統と思われるが、26日に大阪に投下された爆弾を2発としている。『朝日新聞東京本社』の投弾記事が日付の点で、もう一歩疑点があるだけに、大阪系統の「26日大阪に2弾」の可能性は捨てきれない。

Target name : Yaizu RR Yards

(焼津鉄道操車場：静岡県志太郡焼津町)

『写真が語る原爆投下』に、「午前8時51分、静岡県焼津市中港弁天公園付近に投弾」との爆裂写真を掲載している⁽¹⁶⁰⁾

『模擬原爆と春日井市』に、「爆心地は中港五丁目一四の二七杉山喜作さん宅の裏手の松林……時間は一〇時から一時頃と思う」とある⁽¹⁶¹⁾。

『朝日新聞東京本社 (7/28)』は「一機來襲」への油断を戒める記事で、「二十六日朝八時四十五分静岡県でも一機投弾が二件あった」としているが⁽¹⁶²⁾、前記したように(「島田町」「濱松市」条)、当日、静岡県には島田町・濱松市・焼津町の三箇所に模擬原爆が投下されている。情報が正確に伝わっていない。

当時は、静岡県志太郡焼津町。現・静岡県焼津市。

【7月29日】

Target name : Ube Nitrogen Fertilizer Co.

(宇部窒素肥料会社：山口縣宇部市)

『写真が語る原爆投下』に爆裂写真が掲載されている⁽¹⁶³⁾。

『宇部大空襲 戦災50年目の真実』に、「模擬原爆……(七月二九日)第一発目は、同日午前八時四十一分、宇部窒素肥料会社を標的に投下されましたが、標的をはずれて宇部市西海岸通一丁目の住宅近付(現在の宇部市新町、オオバヤシスポーツ斜め前の道路上)に落下」とある。

また、同誌は、死亡者は厳密には確定しないと
し、記録する会の確認では、死亡10名、他に氏
名不詳1名としている⁽¹⁶⁴⁾。

Target name : Ube Soda Co.

（宇部曹達会社：山口縣宇部市）

『写真が語る原爆投下』に爆裂写真が掲載さ
れている⁽¹⁶⁵⁾。

『宇部大空襲 戦災50年目の真実』に、「模擬
原爆……二発目は宇部曹達会社（現、セントラ
ル硝子）をねらい午前八時四九分に投下し、同
工場を直撃」とある。また、同誌は、死亡者は
厳密には確定しないと、記録する会の確認で
は、氏名不詳2名としている⁽¹⁶⁶⁾。

Target name : Nippon Motor Oil Company

（日本発動機油会社：山口縣宇部市）

『写真が語る原爆投下』に爆裂写真が掲載さ
れている⁽¹⁶⁷⁾。

『宇部大空襲 戦災50年目の真実』に、「模擬
原爆……三発目は日本発動機油会社（現在の宇
部市ガス付近）を目標に午前九時二分に投下さ
れ、宇部市東海岸通（現、東本町一丁目）の梶
山文作商店を直撃しました」とある。また、同
誌は、死亡者は厳密には確定しないと、記録
する会の確認では、死亡4名、他に氏名不詳1
名としている⁽¹⁶⁸⁾。

Target name : Koriyama Light Industry

Koriyama Marshalling Yard

（郡山軽工業：福島縣郡山市）

（郡山操車場：福島縣郡山市）

『朝日新聞東京本社（7/30）』に、「見出し（1
段）郡山にも大型弾」とあり、以下のように記
している。

二十九日午前八時半頃B29二機は平市を
経て郡山市に侵入大型爆弾を市内三箇所
に投下した⁽¹⁶⁹⁾。

『毎日新聞 [東京]（7/30）』に、「見出し（1
段）：郡山にも投弾」とあり、以下の記事があ

る。

【福島発】廿九日午前九時頃福島縣東南部
から侵入したB29四機のうち二機は郡山市附
近に投弾して茨城縣へ脱去した⁽¹⁷⁰⁾。

『毎日新聞 [大阪]（7/30）』に、「見出し（1
段）：郡山にも投弾」とあり、以下の記述があ
る。

廿八日午後九時四十分ころB29三機、同十
時ころ一機が平市地区に侵入投弾、次いで廿
九日午前九時ころ福島縣東南部から侵入した
B29四機のうち二機は郡山市附近に投弾して
茨城県に脱去した⁽¹⁷¹⁾。

『讀賣報知（7/30）』が、「見出し（1段）：
平市に火災発生」とし、以下の記事載せてい
る。

【福島電話】……また廿九日朝福島地區に
侵入したB29三機のうち一機は郡山市上空を
旋回のち爆弾を投下したが被害は軽微だっ
た⁽¹⁷²⁾。

朝日東京が「3ヵ所に投弾」としているが、
同時に2機とも記しており、「509th CG表」も
Koriyama Light Industry 及 び Koriyama
Marshalling Yard に、各一個ずつ投下とあり、
『日本都市戦災地図』郡山市も29日の爆撃マ
ークは二箇所であり⁽¹⁷³⁾、爆撃は二箇所と思わ
れる。

『ふくしま 戦争と人間』に、「（七月）二十
九日＝快晴。午前八時三十分、B29二機が県
南に侵入、県内に警戒警報が出る。いったん
会津に向ったが、途中で反転して郡山上空を
旋回、郡山駅中心部めざし破壊爆弾を投下、
日東紡郡山第三工場周辺にも投弾する。郡山
駅付近で二十四人が爆死、日東紡で十五人が
爆死した。郡山駅は大破し、列車の運行が不
能となった。……

◎郡山空襲は白昼の大型爆弾の投下であ
る。郡山駅構内に一発、日東紡付近に一発。
この突然の投弾によって死者三十九人など大
きな被害が出た。郡山駅の記録によると〈午
前八時三十三分警戒警報、同三十五分来襲急

報、同四十六分非常急報、同九時十五分投弾を受ける。三機来襲のうち一機が郡山駅、二機が日東紡に向かい攻撃。郡山駅構内をめがけた爆弾は駅講習室付近に落下、一トン爆弾と判断される。講習室、輸送本部、輸送室、診療所、保線区、通信区が全壊、また駅舎本屋が半壊する。職員の死亡が十人、旅客の死亡十一人、市民の死亡三人を出し、重軽傷二百四人が出る」とある。日東紡（第三工場＝当時は中島飛行機で使用）への爆弾は、北側約二百メートルの水田に落ち、工場北側が半壊し、工員十五人が爆死した。郡山は四月十二日に工場地帯が爆撃を受けており、これが二度目の被災⁽¹⁷⁴⁾。

新聞には、「被害は軽微だった」との常套句が記されているが、甚大な被害を出している。『郡山戦災史』も同様詳説している⁽¹⁷⁵⁾。同誌は「一屯爆弾」としている。また、『模擬原爆と春日井』も着弾点を日東紡郡山第三工場（郡山市長者パラマウント硝子北）、郡山駅便所前ポイント付近とし、現地調査の結果を記している⁽¹⁷⁶⁾。

ところで26日（木）の平市爆撃同様、この日も一旦会津に侵入してのち反転している。

猪苗代測候所にやはり当時の気象データが残されており、気温・風速・日照等のデータを詳細に検討された福島気象台の千葉仁一氏は、29日の気象状況を次のように推測されている。

29日は最高気温が28.8度であった。7時までは下層雲により曇っていたが、7時前後に下層雲が消滅した。その後は15時頃までは薄曇りの状態で、9時頃から14時頃太陽の周りに薄いかさが観測されていた。15時以降再び下層雲が多くなって曇りとなった。夜には快晴となった（快晴となった時間は不明）。このことから29日は朝と夕方に曇っていたことと推測される。風はそれほど強いという感じではない。

この気象状況とB-29の反転との間の因果関係は不明だが一つの状況として挙げた（26日「平市」条参照）。

<注>

- (76) 『新潟日報』昭和二十年七月二十七日（金）二面
- (77) 『毎日新聞 [大阪]』昭和二十年七月二十七日（金）一面2版
- (78) 『讀賣報知』昭和二十年七月二十七日（金）一面二版
- (79) 「『新潟日報』1997年（平成9年）8月4日（月）1・23面12版」。「同5日（火）22面」「同6日（水）26面」。（沖田信悦氏提供）
- (80) 編著者 市史編さん委員会『柏崎市史』下巻 市史編さん室。平成二年。660頁
- (81) 『新潟日報』昭和二十年七月二十七日（金）二面。前記、柏崎でのリード記事の前般部分である。
- (82) 『朝日新聞東京本社』昭和二十年七月二十七日（金）一面2版
- (83) 『朝日新聞東京本社』昭和二十年七月二十八日（土）二面2版。投弾地の近辺を國鉄磐越西線が通り、阿賀野川に深戸鉄橋が架かっている。
- (84) 『毎日新聞 [大阪]』昭和二十年七月二十七日（金）一面2版
- (85) 『讀賣報知』昭和二十年七月二十七日（金）一面二版
- (86) 齊藤正美「鹿瀬にも爆弾が落ちた」『誓いをあらたに 戦後五十年を機に』東蒲地区平和環境労働組合会議記念誌編集委員会 一九九五年。13-17頁（沖田信悦氏提供）
- (87) 前掲書『誓いをあらたに 戦後五十年を機に』長谷川フミ「昭和二十年七月二十六日の空襲～向鹿瀬丈山爆弾投下五十年に際して～」31-35頁。
- (88) 編著者 新潟県東蒲原郡校長会『東蒲教育史稿』新潟県東蒲原郡校長会。昭和46年。77-78頁
- (89) 樋田正「思い出」『文集木枯』（新潟県東蒲原郡）両鹿瀬中学二年一組。昭和26年。（安藤正恵様提供）
- (90) 前掲 田中孟『原爆投下作戦 Tactical Mission Report・Field Orders 及びその註解』付篇A（戦闘）43頁

PUMPKIN（模擬原爆）の投下を当時の日本の報道機関はどう報じたか（二）

- (91) Basic Processing Industries “Chemicals”, *Records of the U. S. Strategic Survey, Entry 47: Joint Target Group Air Target Analyses*, The National Archives, National Archives and Records Administration, Washington, 1991. File No.31, 911. 同頁に“showa Fertilizer Co., Kanose Plant 90: 9-1536”とある。なお、同頁右上に Date・・15 June 1945とある。
- (92) 内海愛子『日本軍の捕虜政策』青木書店。2005年。282-83頁。
- (93) ケネス・カンボン著 森正昭訳『ゲスト・オブ・ヒロヒト 新潟俘虜収容所 1941-1945』築地書館(株)。一九九五年。237-38頁。
- (94) 『昭和史の天皇』4。読売新聞社。昭和五十五年。58頁。
- (95) 前掲『日本軍の捕虜政策』255頁。
- (96) 前掲 *Records of the U. S. Strategic Survey, Entry 47: Joint Target Group Air Target Analyses*, “Tokyo Electric Power Supply Area”に“Kanose 90.9-1590”との表記がある。なお、同頁右上に Date 21 May 1945とある。同発電所の当時の出力は49,500kW。現・東北電力鹿瀬発電所。現在は、当時可動していたインクラインが撤去され、その跡に第二発電所が設置され全出力104,500kWとなっている（『電力発電所設備総覧（平成17年新版）』日刊通信社。平成17年。50・55頁）。
- (97) 前掲 *Records of the U. S. Strategic Survey, Entry 47: Joint Target Group Air Target Analyses*, “Location of Japanese POW Camps Part I”
- (98) 前掲『日本軍の捕虜政策』。282-83頁。
- (99) 沖田信悦「砂時計の中の昭和電工鹿瀬工場（番外編）地塘に沈んださまざまな錘鉛」『ゆきつばき』29号。新潟県立津川高等学校同窓会関東支部。2002年。44-45頁。（著者提供）
- (100) 前掲「『新潟日報』1997年（平成9年）8月4日（月）」。同5日（火）同6日（水）
- (101) 前掲『写真が語る原爆投下』112-113頁
- (102) 前掲『写真が語る原爆投下』110頁
- (103) 編者 日立市の戦災と生活を記録する市民の会『日立戦災史』日立市役所。昭和57年。284-85頁
- (104) 前掲『模擬原爆と春日井』40-42頁
- (105) 『福島民報』昭和二十年七月二十七日（金）二面
- (106) 『福島民報』昭和二十年七月二十八日（土）二面
- (107) 『福島民報』昭和二十年七月二十九日（日）二面
- (108) 『讀賣報知』昭和二十年七月二十七日（金）一面二版
- (109) 奥住喜重・工藤洋三『ティニアン・ファイルは語る 原爆投下暗号電文集』。2002年。164頁
- (110) 『新潟日報』昭和二十年七月二十七日（金）二面
- (111) 『朝日新聞東京本社』昭和二十年七月二十八日（土）二面2版
- (112) 編集 福島民友新聞社『ふくしま 戦争と人間』7 痛恨編。福島民友新聞社。昭和五十七年。309-11頁。
- (113) 前掲『日本都市戦災地図』17。32頁
- (114) 平第一小 HP。
- (115) 前掲『ふくしま 戦争と人間』7。309頁
- (116) 前掲『写真が語る原爆投下』111頁
- (117) 牧英雄「ボーイングB-29スーパーフォートレス：開発と各型」『世界の傑作機ボーイングB-29』(株)文林堂。平成7年。19頁
- (118) 前掲『原爆投下作戦 Tactical Mission Report・Field Orders 及びその註解』182頁。青森市が昭和20（1945）年7月28-29日にかけて、61機のB-29に焼夷弾攻撃を受けているが、硫黄島からの発進である。（「奥住喜重『B-29 64都市を焼く 1944年11月より1945年8月15日まで』揺籃社。2006年。108頁」「前掲『世界の傑作機ボーイングB-29』59頁」
- (119) 前掲『世界の傑作機ボーイングB-29』8頁
- (120) 「(付表第二その一) 陸軍常備団隊配備表『戦史叢書99 陸軍軍戦備』防衛庁防衛研修所 戦史部著。東雲新聞社。昭和54年」「編者 新人物往来

社戦史室『日本陸軍歩兵連隊』(株)新人物往来社。1991年。91-98頁)。二十九聯隊以降は第六十五(明治41年6月26日:仙台から移駐)・第八十五(昭和13年7月14日:軍旗拝受)・第二百二十九(昭和16年9月10日:軍旗拝受)・第五百十五(昭和19年4月26日:軍旗拝受)・第二百七十二(昭和20年3月28日:軍旗拝受)・第四百七(同5月2日:軍旗拝受)・第五百五(同6月19日:軍旗拝受)各聯隊と結成が続いていた。

- (12) 「U. S. War Department, *Handbook on Japanese Military Forces*, Louisiana State Univ., Press. Baton Rouge and London. 1995. P. 24」[[訳書]米陸軍省=篇 菅原完二=訳 岩堂憲人他=監修『日本陸軍便覧 米陸軍省テクニカル・マニュアル:1944』。(株)光人社。1998年。31頁)。軍関係で模擬原爆を投下された例としては、舞鶴海軍工廠(後述「舞鶴」条参照)・松山海軍航空隊宇和島分遣隊(後述「宇和島」条参照)があり、7月24日(火)に徳島連隊正面を爆撃された状況説明が模擬原爆のそれを想起させる(後述「徳島」条参照)。

- (12) 「編集 昭和電工株式会社史編集室『昭和電工五十年史』昭和電工株式会社。昭和52年。17頁」「前掲『電力発電所設備総覧(平成17年新版)』199頁」。

- (12) 前掲 *Records of the U. S. Strategic Survey, Entry 47: Joint Target Group Air Target Analyses*, “Tokyo Electric Power Supply Area” に, “Inawashiro No.1 90.10-881, 同 No.2 90.10-900, 同 No.3 90. 10-901, 同 No.4 90. 10-902” が記されている。

米軍が捉えていたように、当時、日本発送電猪苗代第一発電所(所在地=福島県河沼郡日橋村:現・会津若松市。最大出力:昭和20年=50,000kW), 同第二(同村:34,000kW), 同第三(同村:19,200kW), 同第四(耶麻郡駒形村:現・喜多方市。30,500kW)の発電所が稼動していた。同発電電力は主に東京・田端変電所に送電されており、狙われ易い立場にあった、とは言えよう(「東京電力」「編集 福島民報社 福島大百科事

典発行本部『福島大百科事典』福島民報社。昭和55年。80頁)。発電所では鹿瀬発電所が爆撃調査の対象となっている(前述「鹿瀬」条参照)。

- (124) 前掲『写真が語る原爆投下』
 (125) 前掲『B-29 64都市を焼く 1944年11月より1945年8月15日まで』。17頁
 (126) 『静岡新聞』昭和廿年七月廿七日(金)一面
 (127) 小屋正文他著『明日までつづく物語』平和文化。1992年。17・20頁
 (128) 『静岡県 民衆の歴史を掘る一人びとの生きたくらしと歩み』静岡地域史教育研究会。1996年。151頁。
 (129) 前掲『模擬原爆と春日井』48頁。
 (130) 前掲『写真が語る原爆投下』115頁。
 (131) 『朝日新聞東京本社』昭和二十年七月二十八日(土)二面2版
 (132) 『朝日新聞大阪本社』昭和二十年七月二十七日(金)一面2版
 (133) 土居和江・小屋正文・小林大治郎『原爆投下訓練と島田空襲一聞かせてください一九四五年七月二六日のことを』静岡新聞社。1995年。37-41頁。

島田海軍技術研究所とは、海軍技術研究所が大学・民間の技術者等と組んで、強力なマグネトロンを使った所謂殺人光線・飛行機撃墜用の強力電波の開発に当たった研究所。技研三鷹分室での基礎研究もほぼ終わり、昭和19年6月に技研島田実験所(土地7万坪、建坪2千坪という)として本格的な実用研究の段階に入っていた(「中川靖造著『海軍技術研究所—エレクトロニクス王国の先駆者たち』日本経済新聞社。昭和63年。166-67頁」「中川靖造著『海軍技術研究所—エレクトロニクス王国の先駆者たち』講談社。1990年。264-73頁」「前掲『明日までつづく物語』108-43頁」「前掲 *Records of the U. S. Strategic Survey, Entry 47: Joint Target Group Air Target Analyses*」)。

- (134) 前掲『写真が語る原爆投下』114-17頁
 (135) 『中部日本新聞』昭和二十年七月二十七日(金)二面

PUMPKIN（模擬原爆）の投下を当時の日本の報道機関はどう報じたか（二）

- (136) 編集 名古屋空襲誌編集委員会『名古屋空襲誌』
第1号 名古屋空襲を記録する会。1977年。38
-39頁
- (137) 前掲『模擬原爆と春日井』56頁
- (138) 『中日新聞』昭和48年8月8日（水）11面
- (139) 加藤良治「もう一つの空襲があった 名古屋
にも投下された模擬原爆」『歴史民俗学』No.9。
批評社。1998年。275-94頁
- (140) 『朝日新聞東京本社』昭和二十年七月二十七日
（金）一面2版
- (141) 『朝日新聞大阪本社（7/27）』昭和二十年七月
二十七日（金）一面2版（大阪爆撃記事「見出
し：3段。主：反轉，大阪へ投擲」よりの続き）
- (142) 『静岡新聞』昭和廿年七月廿七日（金）一面
- (143) 『讀賣報知』昭和二十年七月二十七日（金）一
面二版
- (144) 『朝日新聞東京本社』昭和二十年七月二十八日
（土）二面二版
- (145) 「旧浜松市空襲被災状況一覧表（消防本部調査
資料）」「旧浜名郡下空襲被災状況一覧表（警察
署資料）」『浜松大空襲』浜松空襲・戦災を記録
する会。1973年。290-93頁
- (146) 前掲『模擬原爆と春日井』45頁
- (147) 『北日本新聞』昭和二十年七月二十七日（金）
一面
- (148) 前掲『日本都市戦災地図』65。128頁
- (149) 編者 瓜生俊教『富山県警察史』富山県警察本
部下巻。昭和40年。120頁
- (150) 編者 北日本新聞社『富山大空襲』北日本新聞
社。昭和四十七年。16頁
- (151) 前掲『米軍資料 原爆投下の経緯 ウェンド
ヴァーから広島・長崎まで』94頁
- (152) 『朝日新聞大阪本社』昭和二十年七月二十七日
（金）一面2版
- (153) 『毎日新聞〔東京〕』昭和二十年七月二十七日
（金）一面二版
- (154) 『『京都新聞』昭和二十年七月二十七日（金）
一面第五版』『神戸新聞』昭和二十年七月二十
七日（金）一面』
- (155) 『朝日新聞東京本社』昭和二十年七月二十八日
（金）二面2版
- (156) 小山仁示著『大阪大空襲—大阪が壊滅した日』
東方出版(株)。1985年。292頁
- (157) 著者 小山仁示・芝村篤樹『大阪府の百年』県
民百年史27。(株)山川出版社。1991年。227-28頁
- (158) 『毎日新聞大阪本社』（夕刊）1991年（平成3年）
12月9日（月）10面・10日（火）10面・11日（水）
11面。全4版。
- (159) 前掲『写真が語る原爆投下』118-19頁
- (160) 前掲『写真が語る原爆投下』120-21頁
- (161) 前掲『模擬原爆と春日井市』48-49頁
- (162) 『朝日新聞東京本社』昭和二十年七月二十八日
（土）二面2版
- (163) 前掲『写真が語る原爆投下』122・124頁
- (164) 宇部市の空襲を記録する会 編『宇部大空襲 戦
災50年目の真実』宇部市の空襲を記録する会。
1995年。152-53頁
- (165) 前掲『写真が語る原爆投下』123-24頁
- (166) 前掲『宇部大空襲 戦災50年目の真実』153頁
- (167) 前掲『写真が語る原爆投下』123・125頁
- (168) 前掲『宇部大空襲 戦災50年目の真実』153頁
- (169) 『朝日新聞東京本社』昭和二十年七月三十日
（月）一面2版
- (170) 『毎日新聞〔東京〕』昭和二十年七月三十日（月）
一面2版
- (171) 『毎日新聞〔大阪〕』昭和二十年七月三十日（月）
一面二版
- (172) 『讀賣報知』昭和二十年七月三十日（月）一面
二版
- (173) 前掲『日本都市戦災地図』18。34頁
- (174) 前掲『ふくしま 戦争と人間』7。316-20頁
- (175) 郡山戦災を記録する会『郡山戦災史』鳴原弥
作。昭和48年。235頁以降
- (176) 前掲『模擬原爆と春日井』33-34頁